様式第９号

学位審査結果報告書

学位申請者氏名　津田尚吾
学位論文題目　有床義歯装着患者に対する補綴歯科治療介入が咀嚼機能およびQOLに及ぼす影響

審査委員（主査）細川隆司　印
（副査）清水博史　印
（副査）粟野秀慈　印

学位審査結果の要旨

提出された学位申請主論文は、義歯新製を希望する患者において、有床義歯による補綴歯科治療介入が咀嚼機能および QOL の改善に有益であるかどうかを明らかにすることを目的に、臨床データを集積し解析されたものである。研究方法は、以下の通りであった。九州歯科大学附属病院義歯科を受診し有床義歯の新製を希望した有床義歯装着患者で、かつ本研究に同意が得られた患者 12 名（平均 69.9±9.81 歳）を対象に、初診時調査項目として、年齢、性別、残存歯数、咬合支持（Eichner 分類）、欠損歯列（宮地の咬合三角の分類）、現有義歯の状態、現有義歯使用期間、全身健康状態（Barthel Index: BI）、病歴、使用中薬剤、DMF および口腔内の補綴状況の 12 項目を調査した。さらに、咀嚼機能評価として、最大咬合力、咀嚼能力、咀嚼スコアの 3 項目、全身的 QOL の評価として、12-Item Short Form Health Survey (SF-12)からの身体的サマリー（PCS）と精神的サマリー（MCS）、および気分や感情の評価（POMS）の 3 項目、栄養状態の評価として簡易栄養状態評価（MNA）、口腔関連 QOL の評価として OHIP-J14 と GOHAI の 2 項目について補綴歯科治療介入前後で評価していた。その結果、補綴歯科治療介入により最大咬合力および咀嚼スコアが有意に増加し、OHIP-J14 と GOHAI のいずれも有意に改善したことから、補綴歯科治療介入は、有床義歯装着患者の咀嚼機能および口腔関連 QOL の改善に有益であることが示唆されたと結論付けているが、一方で、調査期間中において全身的 QOL の有意な改善は認められなかったとしている。

本論文の審査にあたっては、公開審査会での質疑、およびその後の審査委員から論文内容の疑義や修正点等が示され、申請者からは、加筆、修正がされた論文原稿が提出され、再度公開審査を行った。その結果、本論文は、被験者数が少ないことや治療アウトカムの全身的な評価に不十分な点があることなどが指摘された一方で、適切な有床義歯による補綴歯科治療介入によって、咀嚼機能および口腔関連 QOL が有意に改善することを明らかにした点について、意義あるものと考えられた。

本学位審査においては、主査および２名の副査より、研究の具体的方法、研究結果の臨床的意義、当初提出された論文の問題点について指摘があり、申請者よりタイトルを含めた加筆修正、患者の口腔内状況に関するベースラインデータが追加された原稿が再提出されたことから、その修正原稿をもとに審査を行った。以上の経緯により、津田尚吾氏提出の論文については、修正して再提出された論文に対して再審査を行い、主査および副査２名による合議の結果、学位申請主論文として価値あるものとの結論に達した。